



医師として知らなければ恥ずかしい 50の臨床研究

(原著: 50 Studies Every Doctor
Should Know—The Key Studies that
Form the Foundation of Evidence
Based Medicine, Revised Edition)

谷口俊文 訳

●A5 頁304 2015

定価: 本体 3,500 円+税

[ISBN 978-4-89592-833-5] MEDSi 刊

EBM(evidence-based medicine)の5ステップである疑問の定式化・情報収集・批判的吟味・患者への情報提供・振り返りのうち、批判的吟味はとりわけ難易度の高い「関門」です。それ故に、批判的吟味の労力を減らしてアクセスしやすい情報を提供する試みは複数行われています。2次文献であるUpToDate®やDynaMed®は代表格ですし、Journal Watch Online®のように新着論文から興味深いものを選んで要約してくれるサービスもあります。それでも、幅広い分野のマイルストーンとなる重要論文を網羅した本書のような構成というのはあまり目にしません。重要な医学論文についてまとめて知りたい初学者、ジェネラリストにとって特に有用な一冊です。

例えばUKPDS(15章)は、論文発表から十数年が経過した現在でも、頑健robustなエビデンスとしてわれわれの糖尿病診療を下支えしています。CAST試験(8章)は、心筋梗塞後の不整脈を予防するための薬物治療が、実は患者予後を改善しないという結果になり、真のアウトカムの重要性を図らずも示しました。その他にも、われわれの日常診療に変化をもたらした重要な研究が多く掲載されています。

また、発表当初には成果が強調されていても、アカ

デミアや実地臨床の健全な批判に晒されるなかで、その評価が変わることがあります。ワクチンと自閉症の関連は、科学的にはほぼ否定されていますが(38章)、その前には関連性を示唆する論文が発表され、のちに撤回されたものの、影響は残念ながらまだ一部に残っています。本書に掲載された論文は最新ではありませんが、批判に耐え現代医療のスタンダードを形成しています。

各論文の解説の最後には臨床症例が載っています。これも、臨床決断のうえでどのように論文の結果を解釈するか、実際の患者の条件とどのように適合させるか、など示唆に富む内容です。単に論文を批判的に読めることだけがEBMではない、ということがよくわかります。

それにしても、「知らなければ恥ずかしい」と言われると、気持ちがそわそわしてくるのは、恥の文化をもつ日本人ならではの反応でしょうか。原題が「知らなければならぬ(every doctor should know)」だとわかると余計にそわそわ感が増しますが、本書を手にとった私が最初にしたことは、目次をざっと眺めて知っている論文がいくつあるか数えることでした。皆様も、よければ数えてみてください。